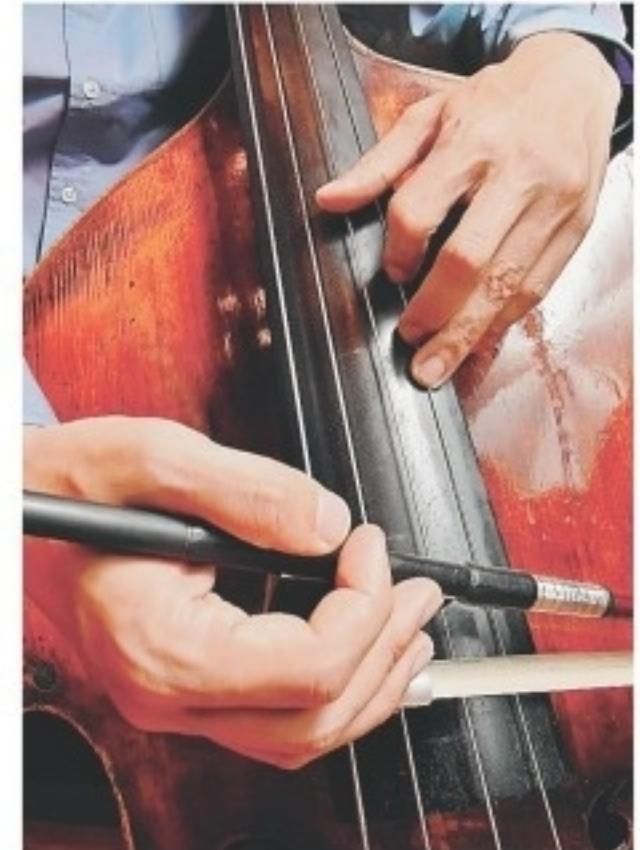
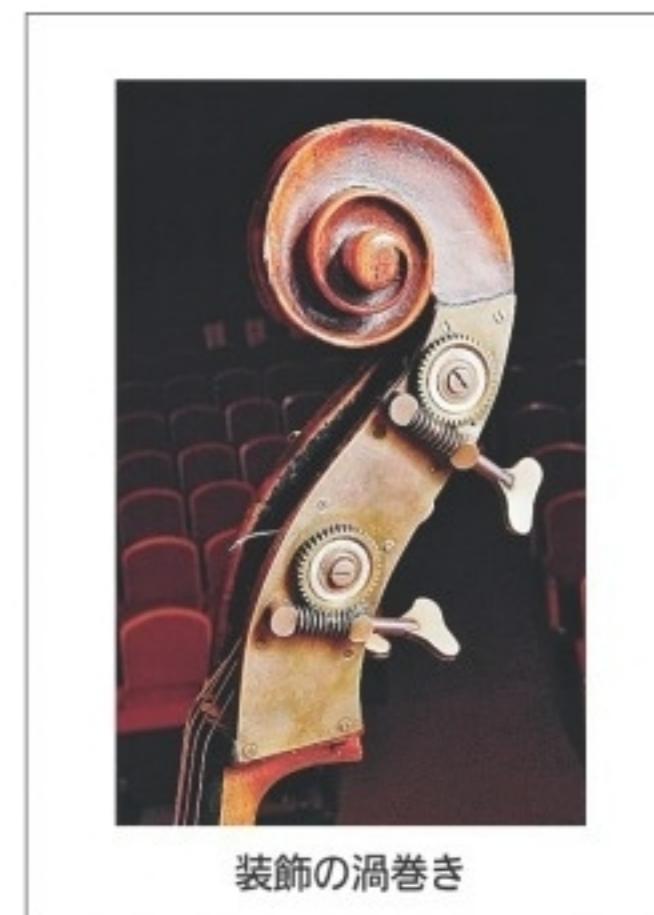




幣隆太朗と愛器「パロッタ」。178ある幣の背丈とほ同じだ=いざれも神戸市中央区楠町4、神戸文化ホール



「一生、理想の弾き方を探す」

NEXTに
動画

聴く

CD

- 「ザ・サウンド・オブ・ダブル・バス」。ピアノは小菅優。ブームスのチエロ・ソナタ第1番などを収録。(3000円) 二料金は税込み=公演
- 2018年2月24日14時、神戸文化ホール。「クラシック プラス特別演奏会」に出演。鈴木優人指揮、神戸市室内合奏団。一柳慧、モーツアルト、ベートーベン作品。S席4000円、A席3000円、25歳以下1000円。17年11月11日から発売。同ホールプレイガイド☎078-351-3349

(記事・松本寿美子、写真・藤亮平)

ゆづくりと流れだした弦の重低音は、苦しい胸の内を明かす独白のようだ。暗い情感に満ちた旋律を奏でる音色は時にうなり、切なそうに泣く。最後の盛り上がりは悲しみから奮起していく息遣いに聞こえた。

19世紀ドイツの作曲家ヨハネス・ブームスの名曲「チエロ・ソナタ第1番」。その名通りチエロ用に書かれた曲だが、幣隆太朗はより大きく、低音のコントラバスで弾く。いかにも重く鈍そうな楽器が、幣の手で意思を備えたかのように太く深い音で歌い出す。

コントラバスの音は人の低い声。地味で不器用と言われ続けてきた楽器だけど、下から響いてくる音は人の心の奥深くをつかむよう、チエロとは違った味わいがある

コントラバス奏者の父とバイオリン奏者の母の間に生まれ、10歳から弾き始めた。息子をソリストに育むことが夢だった父は、大阪にいた最も信頼する奏者奥田一夫（故人）に幣を習わせた。父が8歳ビデオでレッスンを撮影し、家でも弾き方を研究。最初の楽器は小さめのサイズだが、太い弦は大人と同じ。幼い手指は毎日悲鳴を上げたが、うまく弾けない悔しさに泣きながら練習した。

見たこともない美しい楽器だった。弾けば普通はどこかに鳴りにくい場所があるので、高音から低い音までまんべんなく豊かに鳴つた。ちょうど使っていた楽器に表現の制約を感じ始めていたところ。いい時期に巡り合えた

愛嬌のある名を持つ名器は、1790年ころ作られた。幣は2010年、ドイツの田舎町でオーケストラを走年退職する男性から購入。父の代から大切に弾き継いできたという。

愛器はイタリア製「パロッタ」。ドイツの名門オーケストラに在籍し、コントラバス奏者には珍しいソリスト（独奏者）として活躍する。オーケストラで最低音域を担当コントラバスは、和音の土台を支える縁の下の力持ち。バイオリンやチエロのように主旋律を奏でることはあるが、ソロ向けの曲も少ない。そのため幣は他の楽器の曲を厳選し、音程やテンポを調整して奏でる。

音モノ語り わたしの相棒

4

コントラバス奏者 幣隆太朗

表現の限界破る、豊かな響き



イタリア製「パロッタ」

ソリストの意識が芽生えたのは東京芸大入学後、世界的チエロ奏者ヨーヨー・マのCD「バッハ無伴奏チエロ組曲」を聴いたときだつた。周囲には社交的に映つていたが、内実は対人関係に苦しみ、不眠になつていた。

ソリストの意識が芽生えたのは東京芸大入学後、世界的チエロ奏者ヨーヨー・マのCD「バッハ無伴奏チエロ組曲」を聴いたときだつた。周囲には社交的に映つていたが、内実は対人関係に苦しみ、不眠になつていた。

ついでに、1981年生まれ。神戸市北区出身。兵庫県立西宮高校卒。東京芸術大学在学中の2001年に渡独。ドイツ・ヴュルツブルク音楽大学マイスタークラス修了。ドイツ・シュツットガルトのSWR交響楽団団員。兵庫県芸術奨励賞、神戸市文化奨励賞など受賞。



リサイタルにて。幣の低音が聴衆の心を揺さぶる



およそ230年の時を刻む

それから16年。幣はドイツに腰、腕…、体を痛めでは弾き方を見直し、音を磨いた。山の上にあるオーケストラの練習場からは夜も、幣が一人残つて弾き込む音が風に乗つてくる。

舞台上の幣には、その喜びがあふれる。毎年、故郷・神戸で開くリサイタルではコントラバス用に書かれた曲を発掘し、披露する。昨年は初めて作曲家に委嘱した新作を初演。貪欲にソロの可能性を追求する。

大きな楽器だからハードケースに入れて持ち運ぶときは、重くて嫌になる。でも、やっぱり好き。最近そう思えるようになった。やつと本当の良さが分かつってきたのかな

もっと音楽で突き抜けたい気持ちが強く、同級生らとの温度差を感じてしまふ。ヨーヨー・マの演奏に「音楽でこんなに話せるのか」と衝撃を受けた。何の楽器かなんて超越した音楽。自分もそうすればいいんだ、と。人生であんなに救われたことはなかつた

大学3年の夏、ドイツに渡つた。言葉もできず現地で入る大学も決まっていなかつたが、前年に旅先のウイーンで聴いた世界最高峰のベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の音が忘れられず、居ても立つもいられなかつた。母は「せめて卒業だけは」と止めたが、父は「すぐに行け」と背を押した。

藤亮平

音楽が好き。だから頑張れる

音楽が好き。だから頑張れる